





家畜伝染病等の種類	家畜の種類	病原体	概要	診断法	発生状況	体内分布	ヒトへの感染経路	治療法	予防法	参考文献
◎ 馬鼻肺炎	馬	Equine herpes virus 1, 4	2つの原因ウイルスによる疾病の総称。雌乳子馬に鼻肺炎を起こすほか、妊娠馬が妊娠中期以降に急性に感染すると流産を起こす。1型は中枢神経系の異常を起こすこともある。ウイルスに対する有効なワクチンや治療薬はないが、鼻肺炎の二次感染を防ぐには抗生物質が有効。	鼻汁からのウイルス分離、PCRによるDNAの制限酵素切断、抽出DNAの制限酵素切断によるウイルスの電気泳動での確認、血清のCFテスト、中和テスト、ELISA。	世界的に分布。1型は1966～1997年の日高地方での大発生後、日本各地で発生。	上気道で増殖するが、血液を介して胎子へ垂直感染。胎子では多臓器からウイルス分離可能。				動物の感染症(編集:清水池、近代出版)
◎ 馬モルビリウイルス肺炎	馬	Hendra virus	ヘンドラウイルスはパラミクソウイルス科、ミクソウイルス属に分類されるマイナウイルスで、エンペロペロを保有している。監視伝染病の対象動物であるが、ヒトも感染する人獣共通感染症である。自然宿主はオーストラリア原産のオオコウモリ(植物食性)であり、20%以上のオオコウモリがこのウイルスに対する抗体をもっている。またハイガシラオオコウモリからウイルスも分離されている。馬以外では、ネコとモルモットが実験的に感染するが、ネコの自然感染例はない。コウモリのウイルスを含む馬から馬が感染したと考えられる。馬の致死率は67%である。馬での潜伏期間は3日から11日である。発熱が主な臨床症状である。胸膈下リンパ管の拡張を伴う肺の浮腫が特徴的な肉眼病変である。組織学的には、肺の血管内皮細胞に多角巨細胞の形成と出血を伴う間質性肺炎が観察される。	血清中の抗体の測定、間接免疫蛍光法によるウイルス抗原の証明、PCRによるウイルス濃度の検出などがある。わが国にもフルーゴウモリ(リョウキョウオオコウモリ)が生息しており、本疾患の侵入の可能性もある。	本病はオーストラリアでのみ発生した。1994年8月クィーンズランド州マウカイトとそれから南に800km離れたニューサウスウェールズ州のプリズベーンで9月に、その後に発生したが、その報告されたが、その後には発生していない。マウカイトの発生では馬2頭とヒト1名が死亡した。プリズベーンでは馬21頭が死亡し、14頭が重傷の発生で、馬の死因は不明である。また、調教師が感染し、調教師は死亡した。	リハビリがin vitroで阻害活性が認められるが、治療効果は不明。	なし			動物の感染症(編集:清水池、近代出版)
◎ 野兔病	馬、めん羊、豚、いのしし、兎	Francisella tularensis	家畜の種類に記載されている動物の種類のほか、牛、犬、猫、げっ歯類、鳥類、そして人も含む、多くの動物を宿主とする。亜種により病原性が異なる。世界各地で発生し、原因菌は水、土壌、獣皮、死体などに長期間生存、昆虫の刺傷、汚染の飛沫の吸入、汚染水や汚染飼料の摂取、皮膚との直接接触などにより感染。一般に慢性に経過するが、高い致死率を示すこともある。発熱、下痢、衰弱を伴う場合もある。	血液、肝臓、脾臓、骨髄からの病原体の分離、臓器スミアや組織切片中の抗原の蛍光抗体法による検出。沈降反応、血清の試験管内凝集反応、ELISAなど。	世界各地で発生。	全身				動物の感染症(編集:清水池、近代出版)
◎ 馬伝染性子宮炎	馬	Taylorella equigenitalis	細菌のみで発症。無症状態保菌馬との交配により感染。1～14日間の潜伏期の後、子宮内膜炎、子宮頸管炎、陰炎などを発症し、受胎率や低下や流産を起こす。抗生物質や消毒剤による局所療法が有効。1977年にイギリスで初発後、多くの国で発生。日本では1980年から発生が報告されている。	生菌あるいは浸出液のスワブの塗抹染色や培養。本直接観察や分離培養。	アフリカおよびアジアで発生がある。日本国内では、北海道の重厚馬に限定的流行が見られるのみである。	全身に及び、胎盤や精巣など生殖器官への感染が著である。				動物の感染症(編集:清水池、近代出版)
◎ 馬パラチフス	馬	Salmonella enterica subsp enterica	Salmonella Abortusequiは炭水化物非産生性、クエン酸塩を利用しないなど他の血清型と異なる性状を示す。馬への感染は汚染飼料や牧草などを介した経口感染であり、生産牧場における集団的流産が多い。	流産胎児では胃内容、骨髄、流産馬では腸管からの病原体の分離。市販診断用凝集抗原を用いた血清学診断。	アフリカおよびアジアで発生がある。日本国内では、北海道の重厚馬に限定的流行が見られるのみである。	急性胃腸炎、敗血症、病巣感染	抗菌剤投与			動物の感染症(編集:清水池、近代出版)

家畜伝染病等の種類	家畜の種類	病原体	概要	診断法	発生状況	体内分布	ヒトへの疾患	治療法	平防法	参考文献
◎ 小反芻獣疫	めん羊、山羊 しか	Peste-des-petitis-ruminants virus	小反芻獣疫ウイルスは、パラミクソウイルス科、パラミクソウイルス亜科、モルビリウイルス属の1本種RNAウイルスである。牛疫ウイルスと近縁であり、めん羊、山羊の偶蹄目とも呼ばれる。感染動物の分泌、排泄物、汚染物の分泌、密な接触により伝播する。山羊の致死率は高く95%に達する。牛、豚は感染めん羊ははやや低い。牛、豚は感染はするが発症せず。病気を伝播しない。感染後は5-8日の潜伏期を経て、発熱、食欲不振、鼻鏡の乾燥、肺炎、下痢、制膿などの症状を呈し、発症動物からは悪臭が生じる。発熱が認められた場合、急性型は4-7日、亜急性型は2-7週で死亡することが多い。持続感染はしない。	牛疫ウイルスはめん羊、山羊に感染し、類似した症状を誘発するので、鑑別診断が極めて重要である。診断法としては、養天ウイルス抗原反応によるウイルス抗原の検出、痰、血液などを材料としてヒツジ腎細胞を用いたウイルス分離、capture ELISAやRT-PCR法を用いたウイルスの特異的遺伝子の検出などがある。	西アフリカ、中央アジア、リカ、中近東、インドに分布	全身				動物の感染症(編集:清水他、近代出版)
◎ 伝染性膿疱性皮膚炎	めん羊、山羊 しか	Orf virus	伝染性膿疱性皮膚炎(オルフウイルス)は、ポックスウイルス科コルドポックスウイルス亜科パルボポックスウイルス属の2本種DNAウイルスである。ポリオームは卵円形、220-300 nm x 140-170 nmである。ヒツジおよびウシ田糸初代細胞によりウイルス分離できる。分離は難しいが、一度分離してしまえばサル腺腫由来株化細胞やヒト由来細胞などでも増殖する。竹箴状のウイルス粒子が特徴的である。ウイルスDNAのサイズは130-150 kbp、GC含量はおよそ63%である。同属のウシ丘疹性口炎ウイルス、偶蹄目ウイルス、アカンガバラポックスウイルスと血清学的に交差する。監視伝染病の対象動物はしか、めん羊、山羊である。接触感染により伝播する。ヒツジやヤギの口唇、顔面、耳介部、四肢、乳頭などに丘疹、水疱を形成する。まれに膿疱、潰瘍まで進行する。	診断法として、ウイルス分離、電子顕微鏡によるウイルス観察、養天ウイルス内沈降試験による抗体検出を行う。ウイルスは乾燥に対して抵抗性を有しており、罹疫動物との直接接触とともに、病変部が接触した顔、飼育施設、放牧地などが汚染源となる場合もある。感染動物と非感染動物の隔離飼育、消毒、二次感染の防止を行う。	世界的に分布し、若いヒツジやヤギに多く見られる。日本でも発生している。ヒツジ飼いのあいだでは古くから知られており、文献的には1780年代頃から記録がある。			支持療法のみ		1) 動物衛生研究所ホームページ 2) 動物の感染症(編集:清水他、近代出版)
◎ ナイロビ羊病	めん羊、山羊	Nairobi sheep disease virus (Nairovirus)	ナイロビ羊病ウイルスは、ブニヤウイルス科ナイロウイルス属に属する。めん羊と山羊に非常に感受性が高い。多くの国は本ウイルスの持ち込みを禁止し、バイオセーフティーレベル4に指定している。すべてのステージのマガニ(Rhipicephalus appendiculatus)によって伝播される。ウイルスの病原性動物は不明。	臨床症状(高熱、出血性腸炎、衰弱を示す、妊娠中絶、流産、重症例では死亡)、または肉眼的病変(検査から診断は可能。組織培養によるウイルス分離と分離ウイルスの免疫学的同定により確認できる)。	西アフリカに地方病として分布		非常にまれであり軽症。不顕性感染もある。		マダニ咬傷防止のための駆除、畜舎の消毒、羊用のフワンが有効。	動物の感染症(編集:清水他、近代出版)
◎ マエディ・ビスナ	めん羊	Maedi-visna virus	マエディ・ビスナウイルスは、レトロウイルス科レトロウイルス亜科、マクロウイルス属に属する。本ウイルスは慢性的、マクロウイルスに嗜好性を示す。羊のステロイドホルモン感受性免疫不全症(免疫不全)と進行性肺病と進行性脳脊髄炎と、いう2つの異なる病気を起こす。ウイルスの伝播は主に感染母羊から初乳、乳汁を通じての垂直感染だが、呼吸器感染や胎内感染の可能性もある。	ウイルスのp25とp135を用いたゲル内沈降反応、ELISA、ウエスタンブロット、PCRによる遺伝子検出	1937年ごろアイスランドで報告。世界的にはオーストラリア、ニュージーランド以外の主な羊の生産国で発生している。日本での発生は不明。					動物の感染症(編集:清水他、近代出版)